

4. 日の出温泉界限

ケーソン～日の出温泉～住吉神社



子どもの頃から思い出深い朝見川河口の河岸の船溜まりは、昔は結構盛んな漁港だったが、今は寂しい限りになっている。平成26年(2014年)に完成した別府湾海岸保全施設整備事業の陰で、おもかげの残る防波堤はこの部分だけとなってしまった。

のないアトラクション会場に早変わりして、貝やカニ、閉じ込められた魚を捕まえたりして遊んだ。

目の前の漁場では定置網と船曳網、底刺し網、底はえ縄が操業されていて、朝早くケーソンの船溜まりに行くと、大漁の時など10円でバケツ一杯の雑魚をくれたりした。時には定置網に迷い込んだ何トンもあるウバザメをトラックで引っ張り上げることもあった。

ケーソンの内側にはコンクリート舗装された広い犬走があり、ところどころに子どもが何人も入って遊べるくらい大きな鉄製の鍋があった。その頃までは定置網の網地が天然繊維だったため、腐食防止のため定期的に渋で煮ていたのだ。だんだんにクレモナなどの化学繊維に代わって大鍋も役目を終えた。長いこと赤さびた大釜が放置されていたが、いつの間にか姿を消していた。

水揚げされる魚種で一番多かったのがカタクチイワシ(イリコ)だった。街のあちこちでカタクチイワシを煮て干すものだから、向浜の子はイリコ臭いといくからかわれたものだ。今は住居表示変更で広く浜町と呼ばれている地区が、「浜町」のほか「向浜下」、「向浜上」という町に分かれていた。

朝見川の河口左岸側に漁船用の船溜まりがあり、そのの堤防や、そこから当時の関西汽船の別府(楠)港まで続く防波堤を、わたし達はケーソンと呼んでいた。ケーソンとは英語ではCaissonと綴るコンクリート製又は鋼製の大型の箱のことで、中空構造のため海上を浮かせて運ぶことが出来、設置したい場所まで来ると中の空気を抜いて、沈めて水中構造物として使用する。それを重ねて段状の防波堤としたことに因んで、防波堤そのものをケーソンと呼んでいたようだ。もっとも、この地区の防波堤に使われたケーソンはコンクリート製の中空の箱なので、大型の台風に直撃されると波の力でよく壊れたものだった。それはそれで、わんぱく小僧たちにとってはかけがえ



朝見川側から北浜方向の防波堤は、改修されて幅広く、上部はまるで遊歩道のようにになっている。その分、堤防の内側の網を干していた場所などはほとんどなくなってしまった。

「向浜下」の公民館の一階（半地下だが）が我が家御用達のジモ泉「日の出温泉」である。物心ついた頃から、わたしは毎日日の出温泉だった。別府の公衆浴場はどこでもそうだったが、男湯と女湯の間はカーテン一枚で自由に行き来出来るようになっていて。母親がまず自分が体を洗った後、子どもを呼んで洗ってやるというのが当たり前の光景だった。わたしも小学校 3 年生の夏までは、自由に行き来していた。

昔は国道に掛かっている橋の袂に文化アパートという名の市営住宅があり、その木造 2 階建ての集合住宅は、まるで東南アジアの海辺の住宅のように泥の上に杭を打って建っていた。そこは漁船のための船溜まりになっていて、大潮の満潮になると朝見川の河口にある漁港から漁船が上がってきていた。昔の漁船は木造船だったため、たまに真水に晒さないと舟喰い虫に穴だらけにされてしまうのだ。丁寧な漁師は船を陸（おか）に上げて、乾かした上で船底にコールタールを塗っていたが、その作業もそこでやっていた。



国道 10 号線の朝日橋から山側を見ると、右手の市営住宅の場所が昔の文化アパート、左手奥の高層の市営住宅が昔のグリーンハウスのあった場所。

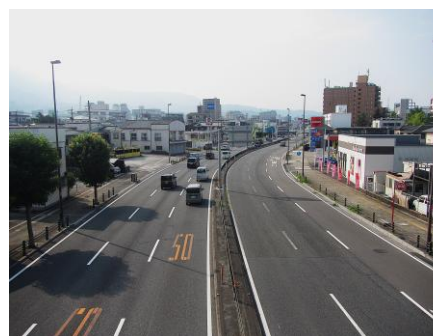
だった。やはり、湯煙漂う朝見川だったから、そんな生態を見ることが出来たのだろう。

川の対岸、少し上流にはグリーンハウスと呼ばれる木造の 3 階か 4 階建ての集合住宅があり、1955 年か 56 年頃に米軍から返還されて、公務員住宅として使われていた。最上階にはドームのような鐘楼のような形の構造物があった。ここも今は大きなマンションのような市営住宅になっている。



日の出温泉も建て替えられているが、1 階が半地下の共同浴場、2 階が地区の自治公民館という構造は今も変わらない。

船溜まりは朝見川が運んできた泥や砂が堆積して、ほとんど使えなくなっていって。さらには今では信じられないことだが、マングローブを形成する樹種のヒルギの仲間（おそらくはメヒルギ）がまばらに生えていて、その根元にはたくさん穴が開いていた。穴にはこれも本来マングローブの住人のはずのオカガニの仲間が潜んでいて、わたし達は草を糸の先に結んで釣っていた。大きなのが取れると勲章もの



日の出温泉の国道に前に掛かる歩道橋の上から別府の中心部方面を望む。昔は画面の真ん中、中央分離帯から右側だけくらいしかなく、しかもその中を別大電車が走っていた。台風の際は高潮が風にあおられて、電車の架線まで届き、青い火花を発していたものだ。